

自分の車を持つこと。それは自由な大人への第一歩。

POPEYE®



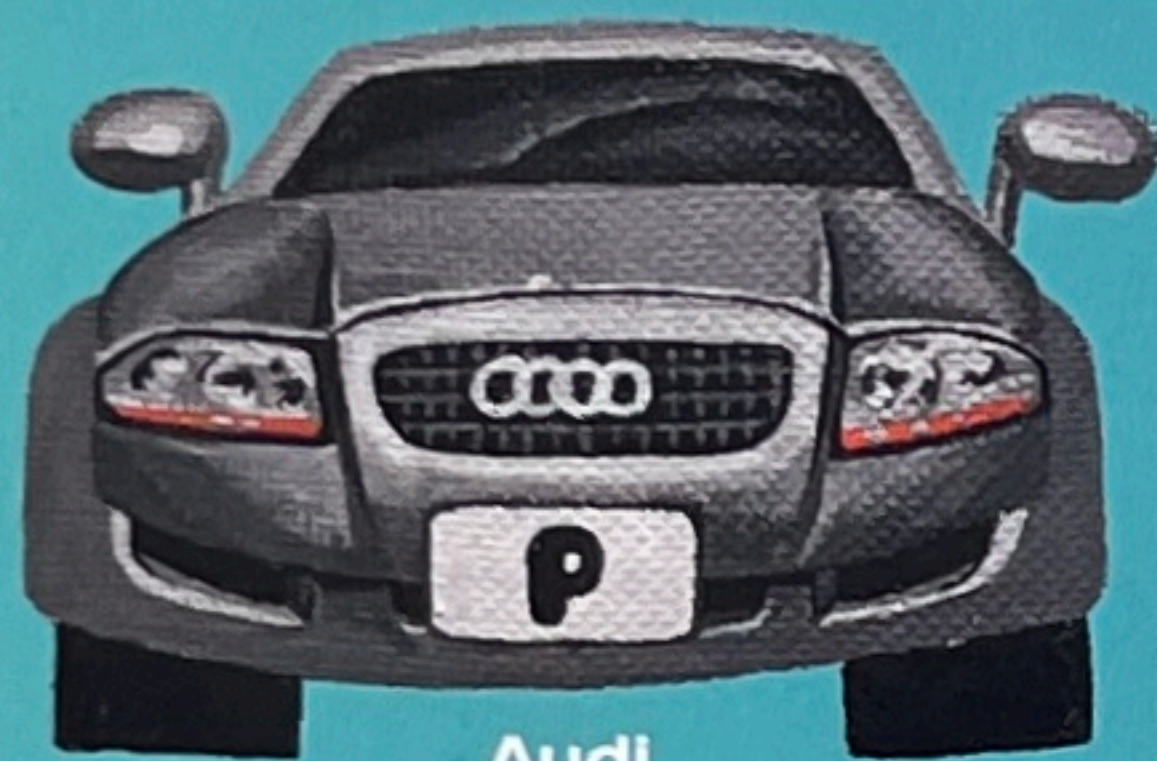
Nissan
S-Cargo



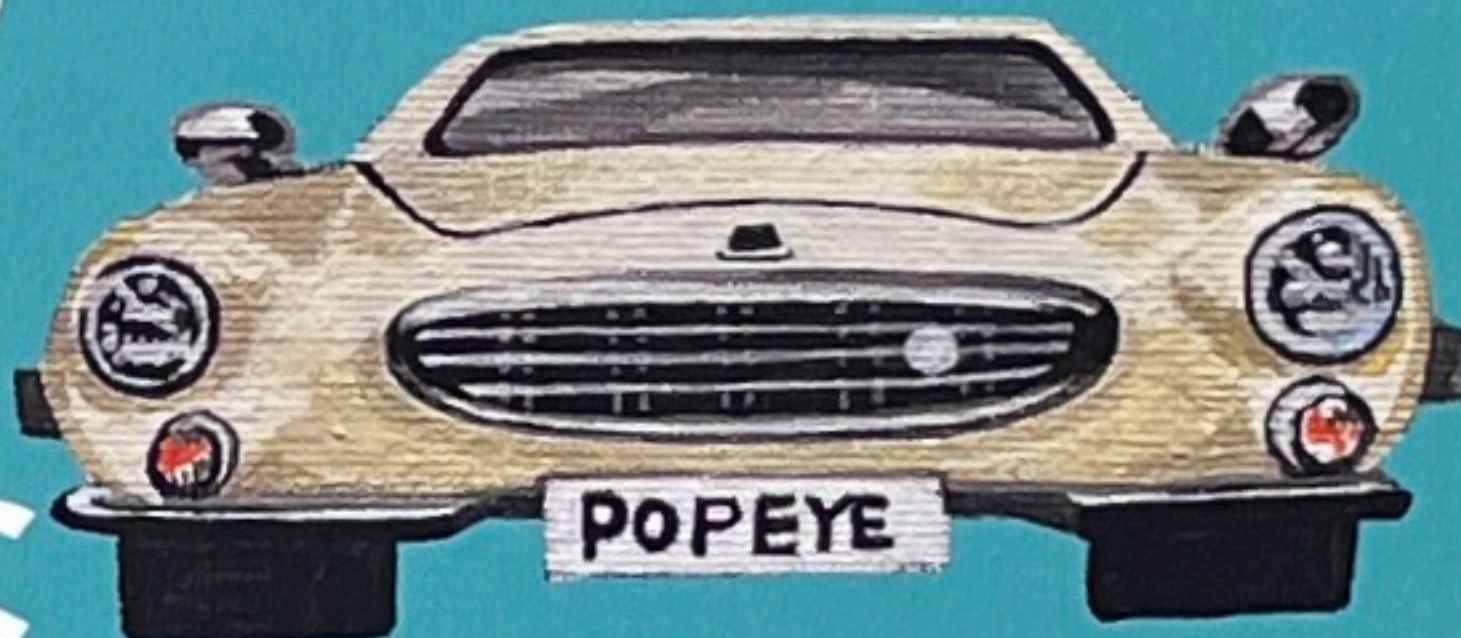
BMW
i3

Magazine
for City Boys

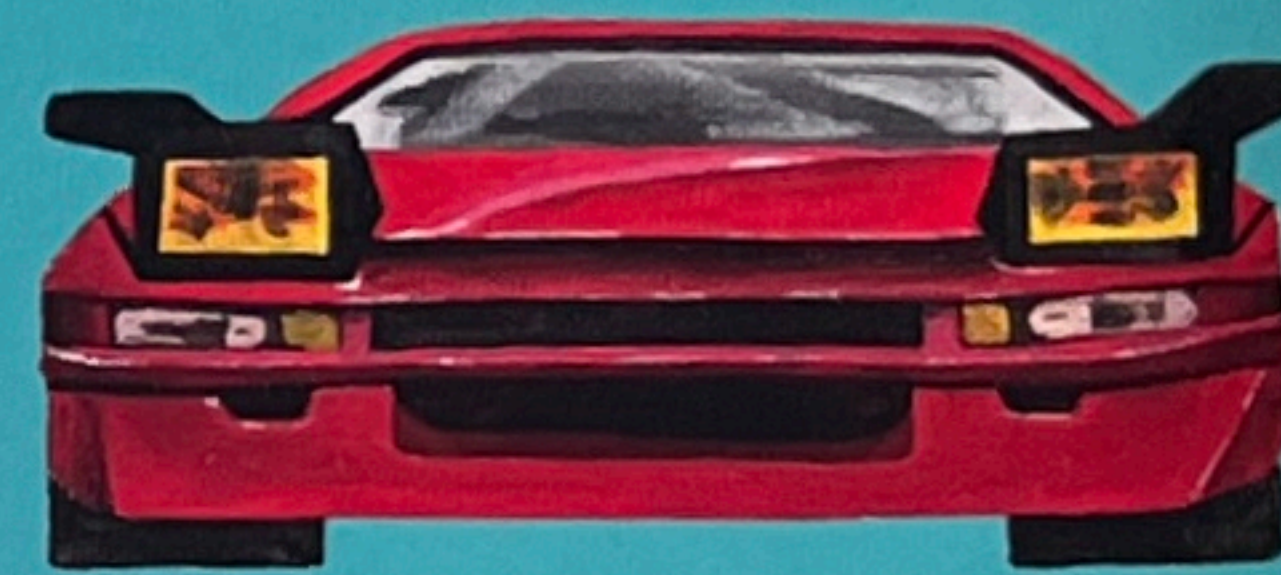
ISSUE 949
FEATURE CARS
2026 MAY
¥990



Audi
TT



Volvo
1800ES



Toyota
Corolla GTS



Flat
Panda



Flat
X 1/9



Kilow
La Bagnole



Honda
Beat



Volkswagen
Lupo



Mercedes-Benz
W123



Mini
Cooper S Clubman



Rivian
R1S



Chevrolet
Impala

好きな車はどこにある？

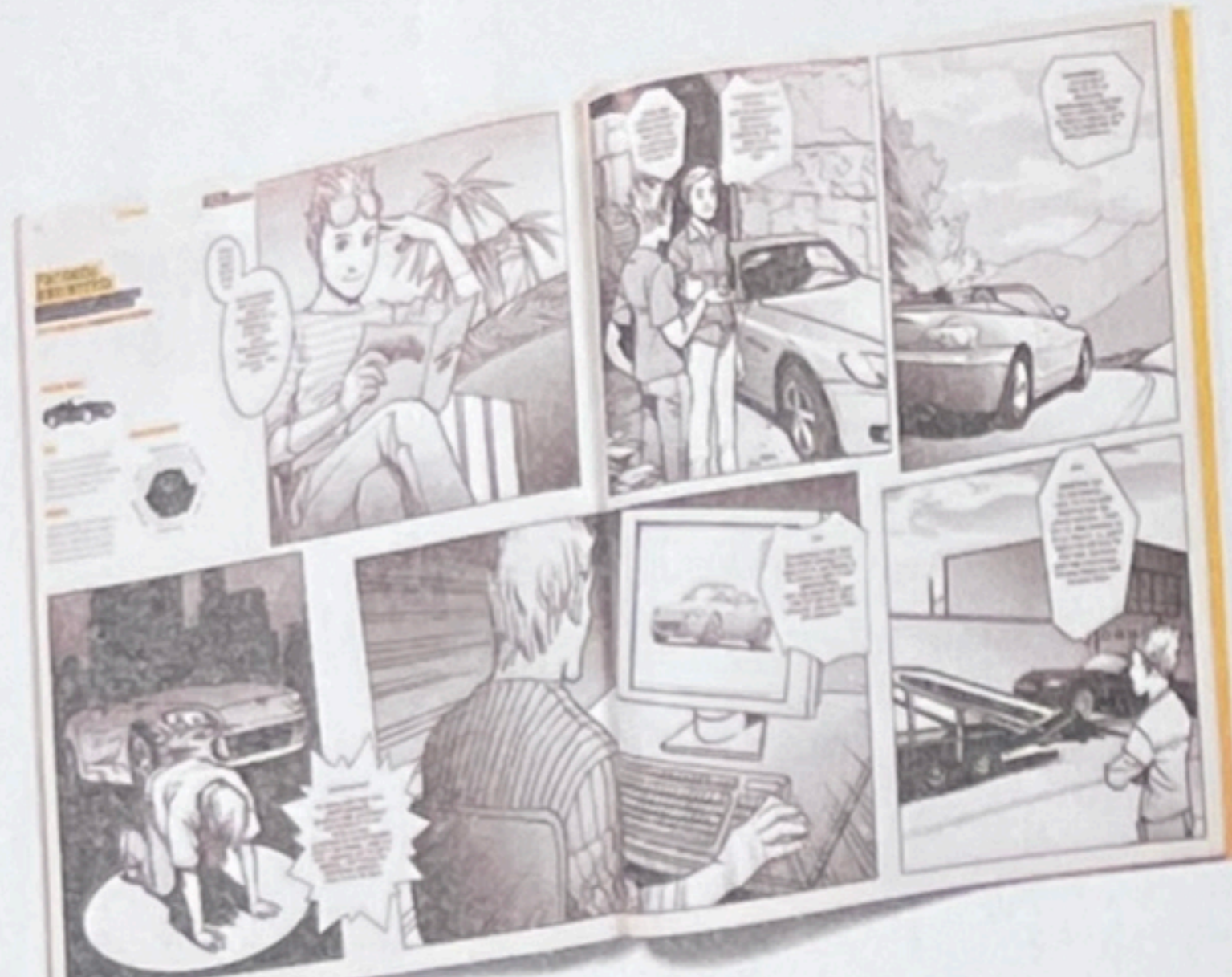
Me
and
My
Car.

5

2026年5月9日発行(毎月9日発行) 2026年4月9日発売 第91巻第5号 価格529円(税別) 三編者共済社刊



「Intersection」創刊号(2001年)の表紙は'80年代のアメリカのアクションコメディドラマ「爆発!デューク」のオマージュでオレンジ色のダッジチャージャーをフィーチャー。「いまとMAGAすぎる表紙だね」



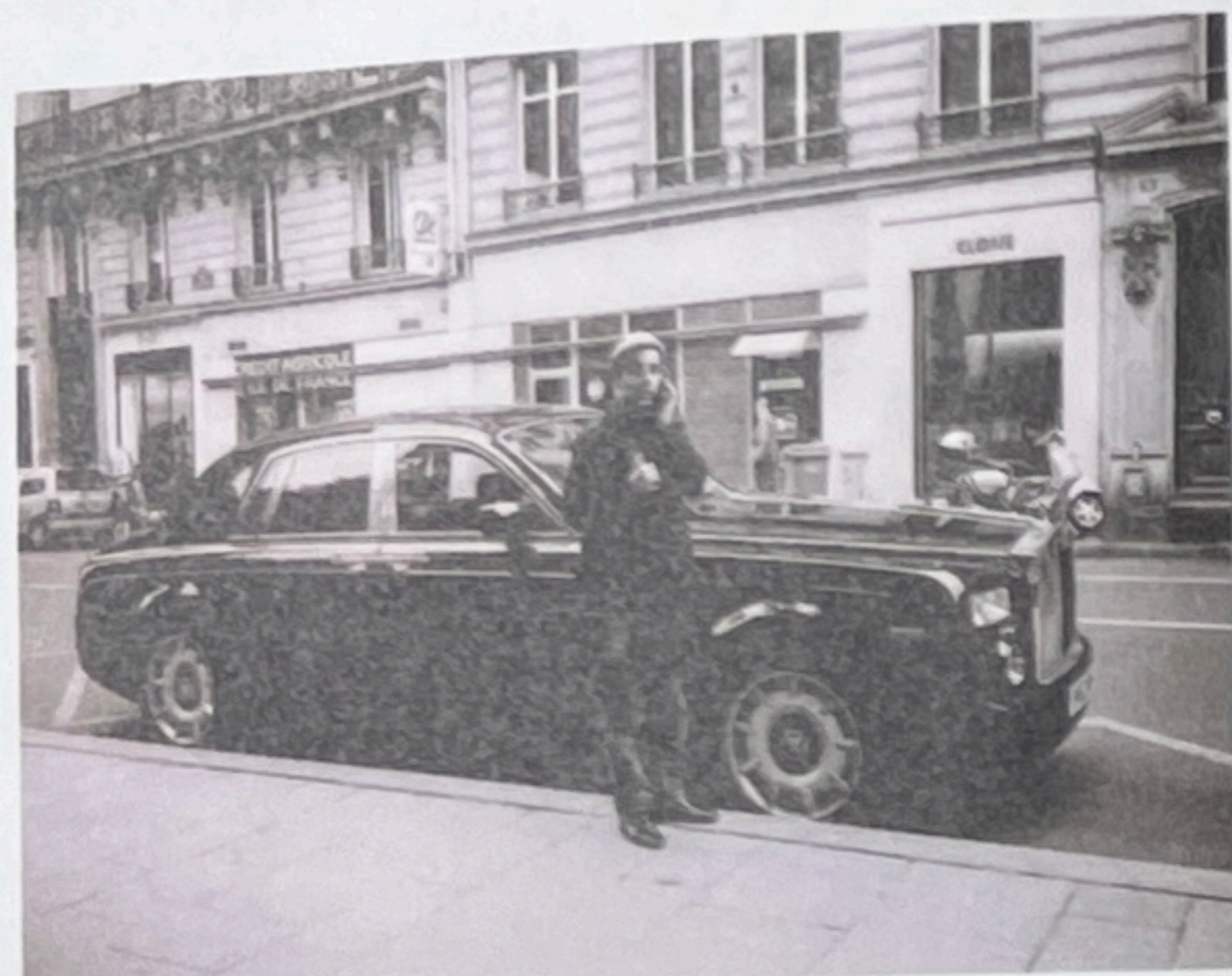
2002年5月にホンダS2000をオマージュにしてみました。週末を漫画化。「Intersection」に掲載。その後もS2000を題材に、写真は母が買ったルノートゥインゴを運転する18歳のヨルゴさん。金色に染めた髪と黄色いボディがマッチ。かわいい。長期試乗車をホンダにオファー。'05年に借りられた!



免許を取って初めて運転したクルマは父のルノー21。ブレーク。学生の頃は自分専用のクルマはなく家族のクルマを運転。写真は母が買ったルノートゥインゴを運転する18歳のヨルゴさん。金色に染めた髪と黄色いボディがマッチ。かわいい。



創業から関わっているスキーブランド(ブラッククロウズ)のロゴマークやスキー板をデザイン。「子供の頃からスキーはよくやっています。アルファを買った頃に再燃。スキー板と自転車を持って山によく行きます」



「Intersection」ではありとあらゆるクルマに乗った。「面白いクルマはたくさんあったけど、いちばん印象深かったのはロールス・ロイス・ファントム。静かすぎるんです。外の音もエンジン音も本当に何も聞こえない。異常なくらい静かでした」



2006年、国際公道ラリー「ガムボール3000」に1971年式のボルシェ911RS2.7で参戦。ロンドンを出発し、セルビア、ハンガリー、タイを経由して、ロサンゼルスでゴール。「レースというよりもロードトリップが好きなんです」とヨルゴさん。



クルマとは、生まれる前から死ぬまで人にずっと付き添うものです。

パリ近郊の自宅前で、キングプレリウドとEVのKILOWとともに、ヨルゴさんが現在所有するのは、この2台とボルボV60と日産キューブの計4台。ボルボは山へ行くため、キューブは海を楽しむため。自宅とは別の場所にある。

PROFILE
Yorgo Tloupas | 1974年、パリ生まれ。パリを拠点に活動するデザイナー。「Intersection」などカルチャー雑誌のアートディレクションでも知られる。ロゴやパッケージデザインも多数。

2 自分を成長させてくれたクルマ

ヨルゴ・トゥルーバス

YORGOとO代表デザイナー

パリ18区。自宅前に停めた初代ホンダプレリウドのトランクにリッドに腰かけながら彼は言った。「去年手に入れたKILOWも入れて、所有してきたクルマは全部で7台かな。ヨルゴ・トゥルーバス。2000年現代初頭に車雑誌「Intersection」を立ち上げた名車を独自の審美眼で、すくい上げ、カーチャーをファッションやアート、デザインと同じ地平で語ってきた人物だ。さぞかし華やかな豪華な生活だろう。と想像していたけれど、「意外と少ないですよ。もちろん、ありとあらゆるクルマに乗ってきたんです。ロールス・ロイスにフェラーリ、ランボルギーニ。でもそれは仕事。所有するのは本当に好きなクルマだけ。ドイツ車とフランス車以外で(笑)」。1974年、ギリシャ人彫刻家フィロオスを父に持ち、パリで生まれた。幼少の頃から、毎年夏になるとパリからギリシャまで車を走らせるのが家族の恒例行事。片道約3000km。「だから最初好きになったのは大型トラック。高速道路を行き交うトラックを見るのが大好きだったんです」。

その当時の家のクルマは? 「父はずっとステーションワゴン。母はカッコいいクルマが好きで、オープンカー。だから、最初に覚えて残ったのは、母のクルマでした。トライアンフの赤いスピットファイア」。じゃあ、トリアンフに憧れは? 「影響はあるけれど、子供の頃はアメ車。トラック好きの影響で四角い大きなクルマが憧れ。'86年、11歳のとき、父の展覧会でヒューストンへ行き、レンタカーでどうしてもシボレーカブリス・クラシックに乗りたかった。70年代の大型セダン。でも来たのは流線形の最新型。本気で泣きました(笑)」。18歳で免許を取り、初マイカーは21歳のとき、美術学校卒業後、フリーのグラフィックデザイナーになり、中古のホンダシビックを購入した。「5代目シビックVTEC。色はシルバー。ホイールは黒くカスタム。とにかく、昔から日本車が好きで、なかでもホンダが好き。本当はZ600を探したけれど、フランスではなかなか見つからない。いまも探しているけど(笑)」。そして、2000年。25歳。2台目を選んでのはホンダS2000。「昔のS800が大好きで、そのDNAを継ぐS2000はどうしても欲しかった。程度のいい中古を見つけたときは嬉しくて。程なくして、ロンドンで「Intersection」の創刊が決まり、S2000と一緒にロンドンへ引っ越し。よく走りました。屋根を開け、大音量で音楽を流し、タイヤを鳴らして、パリへ、ギリシャへ、アルプスへ。完全に調子に乗ってました(笑)」。ところで、「Intersection」はどんなきっかけで始まったの? 「当時僕は、パリのファッション誌の「20」のディレクションをやっていた。ダフト・パンクやエールのようなアーティストに会うと、みんなクルマ好きで話が盛り上がる。でも、そういうライターが読みたいくなる車雑誌がない。じゃあ、作ろう」と、建築家やファッションデザイナー、ミュージシャンなどのガレージを訪ね、ロサンゼルスのカリフォルニア文化、日本のデコトラや深夜ドライブ族、戦場の車にもフォーカス。アーティストイ

リ、クラシックに乗りたかった。70年代の大型セダン。でも来たのは流線形の最新型。本気で泣きました(笑)」。18歳で免許を取り、初マイカーは21歳のとき、美術学校卒業後、フリーのグラフィックデザイナーになり、中古のホンダシビックを購入した。「5代目シビックVTEC。色はシルバー。ホイールは黒くカスタム。とにかく、昔から日本車が好きで、なかでもホンダが好き。本当はZ600を探したけれど、フランスではなかなか見つからない。いまも探しているけど(笑)」。そして、2000年。25歳。2台目を選んでのはホンダS2000。「昔のS800が大好きで、そのDNAを継ぐS2000はどうしても欲しかった。程度のいい中古を見つけたときは嬉しくて。程なくして、ロンドンで「Intersection」の創刊が決まり、S2000と一緒にロンドンへ引っ越し。よく走りました。屋根を開け、大音量で音楽を流し、タイヤを鳴らして、パリへ、ギリシャへ、アルプスへ。完全に調子に乗ってました(笑)」。ところで、「Intersection」はどんなきっかけで始まったの? 「当時僕は、パリのファッション誌の「20」のディレクションをやっていた。ダフト・パンクやエールのようなアーティストに会うと、みんなクルマ好きで話が盛り上がる。でも、そういうライターが読みたいくなる車雑誌がない。じゃあ、作ろう」と、建築家やファッションデザイナー、ミュージシャンなどのガレージを訪ね、ロサンゼルスのカリフォルニア文化、日本のデコトラや深夜ドライブ族、戦場の車にもフォーカス。アーティストイ

ヨルゴさんの歴代の愛車たち。1. 25歳のときに買ったホンダS2000。「ヨーロッパを走り回りました。みんなに見せびらかしたくて買ってしまった」。2. アルファ159スポーツワゴンQ4 Tiは山へ行くために、「ステーションワゴンで四駆で馬力があって楽しくてドライブ車ではない、それが決めた手」。3. デザインにひと目惚れした日産キューブ。「毎にも一台プレゼント。88歳で元気に運転しています」。4. アルファの後に購入したボルボV60ポレスター・エンジンアード。「四駆で405馬力で速い。でも見た目は控えめ。長距離移動にいい」。

HOW TO BE A MAN WITH CARS



KILOW LA BAGNOLE (2025)

スタートアップ企業が開発したEV。最高時速80kmで約70km走行可能。ヨルゴさんは車名を発売しロゴもデザイン。パリ市内の移動に便利。恋人アーティストのカメラマン・メナードさんが荷物の運搬でよく使用するそう。



HONDA PRELUDE (1981)

ホンダが1978年に発売したFF2ドアクーペ。ヨルゴさんが所有するのは初代5N型。1.6Lエンジンを搭載。サンルーフが装備。15年前に15万円ほどで購入。走行距離は約4万kmだったそう。「一生乗って決めてます」

ックでクルマの写真とデザインで。クルマを通して社会を見る。姿勢が話題になった。だが、悲劇が起る。「あれは忘れもしない'02年5月23日。深夜、S2000で帰宅中に路面のオイルで滑ってスピン。高速道路の両壁にぶつかった。単独事故で誰も傷つけず、僕も無事。でもクルマは全損で廃車……。あのクルマは馬力があるから、コントロールが結構難しい。ボンヤリ運転していた僕のミスです」。大きなショックと止めどない後悔。しばらく自分のクルマは持たなかった。「欲しい」と思えるクルマに出合わな

ったからだ。2010年、雑誌も一段落し10年ぶりにパリへ戻る。「その後、この初代プレリウドに出合ったんです。年配の男性から格安で譲り受けて。一生乗るよと決めました」。プレリウドに乗りはじめた11年は、自身のデザインスタジオを設立し、ピグメントの仕事を急増した頃。「同じホンダで2ドアではあるけれど、ずっと控えて、スポーツカーでもない。エネルギーシな雑誌の日々を経て、少し落ち着いて、大人の運び方になつたかもしれないですね」。その後はアルファ・ロメオやボルボのワゴン、日産キューブと、用途別に複数台持つように。キューブはカーデザイナー中村史郎氏による非対称な造形が気に入った。サーフボードを運ぶために海辺に置いてあり、80歳を超えて運転を楽しむ母にも「台贈った。ただ、アルファもボルボも見ると、家族のためクルマのようだけれど、アルファは159スポーツワゴンQ4 Tiだったし、その後のボルボはV60ポレスター・エンジンアード。ダックボディーの顔で中身は高性能。羊の皮をかぶった狼。つまり、スリパーなんです。ボルボなんて山道ではボルシェを軽く追い抜く。だから#volvoislifeのハッシュタグをつくりました(笑)」。そんなヨルゴさんがクルマから学んだことって、どんなことだろう。「クルマほど多くの技術が詰まり、五感で触れる工業製品はない。デザインで目に訴え、エンジン音やオーディオが耳に届き、ガソリンやレザーの匂いがあり、ステアリングやシートの感触がある。だから、仕事でよく参照する。ファッションブランドのサフラインを考案するとき、メルセデスのAMGが、BMWのMがどちらに近いかな?」

シルバーボディのクルマが多いのは「クルマのカチカチがいかんよわかる色だから」。今後乗ってみたいクルマは「ケンタム。イギリスの小型スポーツカーなんだけど、軽量でシンプル。でもパワーがあって、何十年と変わらないスタイルを買いたいのが好き。昔、CSR260でヨーロッパを横断したことがある。以来理想のスポーツカー。ケンタムに乗っていると、道を行く人たちがこっちを見てみんな笑顔になってくれる。結局エドとそうはいかないよね(笑)」。そして、「クルマって、結局子供が乗りに遊んでいたミニカーの実物大。だから、ずっと子供のままでいさせてくれるのがクルマでもあると思う」。

(Yorgo Tloupas's Car History)

1995年 21歳 (Honda)	CIVICVTEC
2000年 25歳 (Honda)	S2000
2011年 37歳 (Honda)	PRELUDE
2017年 43歳 (Alfa Romeo)	Alfa 159 Sportwagon Q4 Ti
2019年 45歳 (Nissan)	CUBE
2020年 46歳 (Volvo)	V60 Polestar Engineered
2025年 51歳 (Kilow)	LA BAGNOLE